

《解説》

石川清子

ここに訳出したのは、フランス語で書かれた小説 *Leïla Sebbar, Shezazade, 17 ans, brune, frisée, les yeux verts, Stock, 1982* (レイラ・セバル『シェラザード、

十七歳、髪は褐色の巻毛、目は緑色』ストック社、一九八二年)の最初の五章である。本書は全五十四章からなるが、各章にそれぞれ関連する固有名詞の題がつけられ、章立ての目次を見ただけでも作品のハイブリッド性が想像できよう。アトランダムに章名をあげると、ドリス、メリエム、ジャミール、オマル、ヴェルディ、ヴァンヴ、マチス、アルジェリア、ゴダール、シャトレオルレアン、フロマンタン、ウム・クルスム、リッツと、フランス語由来ではないファーストネーム、パリとフランスの地名、パリ高級ホテル、近現代の芸術家・作家という具合にさまざま要素がいっしょくたに並んでいる。訳出した五章分でも、一九八〇年代のポンピドゥー・センター付近のファストフード店(当時の最先端の流行だろ)を舞台に恋愛物語を予感させそうな出会いから始まり、ピエール・ロチ、ドラク

ロワ、アルジェリア、フェラウンと話題が逸れ、瑣末的なトピックへと入ってゆく。これは、どんな作家が書いたどんな小説なのか。

レイラ・セバルは一九四一年、アルジェリア人の父、フランス人の母からアルジェリアの内陸部、ラグアート北西の町アフルーで生まれる。両親ともに小学校の教師で、一家は校内の住宅に住み家庭ではフランス語を使用、「父の言語」アラビア語は一切使用しなかったという。訳出した「ブーザレア」の章でテネス出身のジュリアンの父の同僚が語る部分は、セバルの父をモデルにしたと思われる。セバルの父はフランスで研修中に妻となる女性と出会った。セバルは大学入学の十八歳からフランス在住。アルジェリアの家族もその後ニースに移住し、現在パリに住み執筆活動をしている。アラビア語の姓名をもつ混血フランス人であり、アルジェリア生まれなのにアラビア語はうまく話せず、かつセバルが一〇代だった五〇年、六〇年代は、アルジェリア独立戦争の苛烈な時代と重なる。アルジェリアの伝説小説の系譜をたどると、アラブ人、ベルベル人のいわゆる現地人が伝説教育を受け支配者の言語をマスタ

ーして自己表現の武器とするという大きな流れがあるが、セバルの場合、生まれ育った地という、ルーツとすべき場所と風景が曖昧なまま根を失い、戻るべき地の言葉を手に入れる不可能性を最初から抱えている。この系譜のなかで彼女の位置は独特であり、また、八〇年代以降話題になるフランス在住の北アフリカ系移民二世代の作家とも出自が異なる。八〇年代のセバルは、その移民二世代の若者たちに共感を寄せ、彼ら、彼女らを主人公に物語を作っていた。自らと同じ二重の追放という境遇を、アルジェリア／フランスという引き裂かれるべき二つの文化のどちらとも断片的にしか所有しない若者たちに見出し、*métissage* (混血性、混濁)、『*croisée* (交差)』という鍵語を振りどころに物語を紡いでいった。ミッテラン社会党政権が誕生し、「相違への権利」という多文化主義的発想が時代を席巻した八〇年代のフランスである。本作は、パリ郊外でアルジェリアの両親から生まれたシェラザードという十七歳の家出娘が、アルジェリア生まれのフランス人でオリエンタリズム絵画オタク青年、ジュリアンと出会って、文化のハイ／ローのコードを撚り合わせながら様々な文化的知

識を吸収し自己形成してゆく一種のビルドアップスロマンであるが、シエヘラザードではなくシエラザードという名前自体、既にフランス化され変形し、伝説的なオリエント女性のクリシエを壊したところから物語が始まる。セパールは本作を皮切りにシエラザード三部作を書いている。オダリスクとして眺められる主人公が行動する主体をどのように見つけてゆくか、「シエヘラザード」たる語り手としての術をどのように獲得してゆくかは続く『シエラザードの手帖』『シエラザード狂い』で展開する。また、ジュリアンは主人公の合わせ鏡のような存在で反面教師でもあるのだが、生まれ育ったアルジェリアを語るときの強度のノスタルジーの背後には、セパール自身が見え隠れする。

三部作は軽快かつ痛快に展開してゆくアルジェリア移民の娘の物語だが、個人的には物語そのものより、付随して書き込まれる些細な事柄の妙に興味をそそられる。本作でも、アルジェリアの昔の入植者の暮らしから逸脱して、当時の女子教育の資料が仔細に報告されるように、ついでの説明が本筋を逸れてかなりの部分を占め、またいつか本筋に戻ってゆくのだが、「ついで」の

瑣末な部分の寄せ集めが結果的に貴重な歴史を語っている。前作『ファティマ、辻公園のアルジェリア女たち』はまさにそういう類いの小説で、活字や映像には残らない、また自分たちでは残せない、そして皆が忘れてしまうであろうアルジェリア移民労働者の妻たちと子どもたちの日常が、女たちの井戸端会議の場となる郊外集合団地の公園を中心に描写される。

作家としてのセパールは小説のほかに、自分の育ったアルジェリアを取り戻す試みのかたちで、複数の作家や証言者のアルジェリアに関するエッセイや物語の編者の仕事もしている。作家としてフランス語で書く意味を自身は次のように語っている――「アルジェリアの私の従姉妹たち、父の姉妹たちの声を私は聞き、そしてそれを母の言葉で書きたい。父に、父の言葉に、アラビア語に、父のアラビア語の沈黙に近づいたために」。セパールの父の友人かつ師であったムールード・フェラウンの、独立直前のOASによる暗殺事件、そしてフランス移住の

事情について、父は頑なに沈黙を貫いたという。語ることを回避した父、従姉妹たちの言葉（それはセパール自身が受け継ぐべきアラビア語の世界だったはずだ）を、もう一人

の自分の言語、フランス語で書くこと。今
回訳出した部分からも、セパールのそういう
秘めた情熱が読みとれよう。